

「人間は滅ぶものである……」

—『オーベルマン』第90信の一節について—

A Monsieur le professeur Eiichi UMÉKI

萩原直幸

アルベール・カミュ (1913-60) の師であり、アルジェのリセで教鞭を執っていたジャン・グルニエ (1898-1971) は、専門の哲学に関する仕事のほかにも文芸評論、美術論、小説、エッセー等の多彩な執筆活動をしている⁽¹⁾。その中でも彼がセナンクール (1770-1846) の撰文集を編んでいたことはあまり知られていないかもしれない⁽²⁾。一方、教え子のカミュは、セナンクールの代表作『オーベルマン』の一節⁽³⁾——本稿ではこれを取り上げることにする——を『ドイツ人の友への手紙』『第4の手紙』(1944)のエピグラフとして引用している⁽⁴⁾。彼はリセの生徒のとき恩師グルニエからこの文学者について何ほどか教わったことがあるのだろうか。だとすれば彼の「不条理の哲学」の形成にセナンクールは何らかの形で関わっていたのだろうか⁽⁵⁾。

ここで日本に目を転じてみると、『オーベルマン』の同じ一節をめぐる影響関係が一目瞭然の師弟がいる。渡辺一夫 (1901-75) と大江健三郎 (1935-) である。後ほど紹介するように、渡辺は著書やエッセーの中で『オーベルマン』のこの一節をたびたび引用しているのだが、大江は自著の中で、そのような恩師の姿を共感をもって紹介しているのである⁽⁶⁾。大江はさらにその後、ある英国の詩人を通してこの一節と再会するのであるが、それもエッセーの中で語られることになる⁽⁷⁾。

さて、カミュに戻るが、彼は『オーベルマン』の例の一節を師グルニエから教わったのであろうか。だが、この一節はグルニエによる上記セナンクール撰文集には収められていないし、セナンクール撰文集と同じ年にグルニエが発表したカミュの回想⁽⁸⁾や、グルニエとカミュの往復書簡⁽⁹⁾にも、セナンクールの名や『オーベルマン』は見当たらないのである。むしろカミュは例の一節をジョルジュ・デュアメル (1884-1966) やミゲル・デ・ウナムーノ (1864-1936) の著作から知ったのかもしれない。デュアメルは当時有力な文学者であり、彼の名は『カミュ＝グルニエ往復書簡』にも2度言及されているのである⁽¹⁰⁾。後ほど詳しく述べるが、デュアメルはエッセー集 *Défense des Lettres* (1937) (以下『文芸の擁護』と称する) の中で『オーベルマン』の例の一節を引用し、また、ウナムーノによるこの一節の「改変」を紹介している⁽¹¹⁾。ただし、デュアメルがセナンクールのどの作品から引用したのか明示してい

ないのに対して、『ドイツ人の友への手紙』には『オーベルマン』第90信と明記されているので、仮にカミュが例の一節をデュアメルを通して知ったとしても、改めて『オーベルマン』に直接目を通していたことになる。

一方、渡辺一夫に関しては、『オーベルマン』のこの一節を引用する際、デュアメルやウナムーノの名とともに紹介することが多く、また、『オーベルマン』という作品名は言及せず、セナンクール（渡辺の表記ではセナンクール）の言葉として紹介するのが常である。

さて、前置きが長くなったが、本稿では『オーベルマン』の例の謎めいた一節について検討を加えることにしてみたい。その際、上に紹介した内外の文学者らによる解釈のあり方が、このテキストをいわば逆照射して、その特徴を明らかにするのではと考える次第である。

* * *

まずコンテキストを簡単に紹介する。例の一節は書簡体小説である『オーベルマン』の第90信の中ほどに現れる。この作品の初版が刊行されたのは1804年であるが、第90信は第2版（1833）に初めて収録された（その書誌的な意味は後述べる）。主人公の青年（以下「オーベルマン」と称する）は、かつてある魅力的な女性を密かに愛していたが、彼女は他の男性と結婚してしまい、Del*** 夫人という名で言及される（初版では「D*** 夫人」と表記）。彼女の結婚生活は不幸なものであったが、数年後、夫と死別し、未亡人となって第90信に再び現れる。自由の身となって数年ぶりに再会した彼女は独特のオーラを放っており、オーベルマンは感動のあまり「彼女を自分のものにして死のう」⁽¹²⁾との誘惑に駆られてしまう。しかしその一方で彼はすでに著作への意志を固めており、結局はその誘惑を断ち切ることにする。

次にこのテキストの形式的特徴について述べる。『オーベルマン』は小説であり、散文作品であるが、中には第61信で語られる「湖上のノクターン」のように散文詩の趣を呈する書簡も見受けられる。我々が取り上げているテキストも、以下に見るように調子がよく、いわば音楽性を備えているので、あたかも詩の一節であるかのように流通したのかもしれない。しかし同時にここで使用されている語は *périssable* にせよ *néant* にせよ、また *justice* にせよ、多義的で曖昧であり、また多少とも抽象的である。それが以下に見られるように様々な解釈を許す誘因となっていると思われる。

問題の一節を以下のように配列してみる。

— L'homme est périssable. —

Il se peut ; mais périssons en résistant,
et, si le néant nous est réservé,
ne faisons pas que ce soit une justice.

1行目の《périssable》と4行目の《justice》の語末のeは無音であり、また2行目の《se》の語末のeを母音(字)省略して《Il s'peut》と読めば、上から5, 10, 10, 10という音節構成になり、破格の1行目を除いてデカシラブの4行詩となる。これは単なる音節の数合わせではなく、各行が意味のまとまりを保持している。もとより定型詩でない以上、押韻は望むべくもないが、強いて述べれば、後で詳しく注釈するように、意味内容を見ると上から順に ABAB と配列されており、いってみれば意味上の押韻がなされていることになる。プロゾディに関しては筆者の手に余るので、触れないでおく。

次に、『オーベルマン』のこの一節がこれまで日本語に訳されているものを発表年代順に並べてみよう(参考までに英訳も掲げる)。これらの日本語訳(及び英訳)はテキスト解釈の上で参考になるのみならず、この一節が実は少なからぬ問題をはらんでいることを示唆している。

- ・渡辺一夫訳「人間は滅ぶものだ。そうかもしれない。だが、抵抗しながら滅びようではないか。そして、たとえ我々の落ち著く先が虚無であるとしても、それが正しいことにならぬようにしようではないか。」(『砂丘での対話』1942)⁽¹³⁾
- ・市原豊太訳「——人間は滅びるものだ。——さうかも知れぬ、しかし抵抗しつつ、滅びよう、そして若し虚無が我々を待ちうけてゐるにしても、それが正しいことであるやうにはしない。」(セナクール『オーベルマン』1959)⁽¹⁴⁾
- ・白井浩司訳「人間は滅ぶべき者である。そうかもしれない。しかし抵抗しながら滅びよう。そして虚無がわれわれに予約されているとしても、それが裁きであるようには振舞うまい！」(カミュ『ドイツ人の友への手紙』『第四の手紙』1972)⁽¹⁵⁾
- ・神吉敬三/佐々木孝訳「人間は死すべきものである。確かにそうかもしれない。しかし、抵抗して死のうではないか。そして、無がわれわれに予め定められているとしても、それを当然とは思わぬことにしよう。」(ウナムーノ『生の悲劇的感情』1975)⁽¹⁶⁾
- ・英訳《“Man is perishable,” is the response. That may be ; but let us perish resisting, and if annihilation must be our portion, let us not make it a juste one.》⁽¹⁷⁾

以上の諸訳を参考にしつつ、また、使用されている語の『オーベルマン』における他の用例にも注意を払いながら、以下に注解を試みたい。

(第1行) — L'homme est périssable. —

先ずティレ(一)の使用が目につくが、この句読記号は通常、話者の交替を示すために用

いられるものである。最初のティレを挟んでこの文の直前には「c'est de nos fortes résolutions que quelque effet subsistera peut-être.」(p. 503) という文がある。しかし、『オーベルマン』は主人公の青年が知人宛てに手紙をしたためるが、その返事は示されないという、ジャン・ルッセが独唱（一声）型と呼ぶ書簡体小説である⁽¹⁸⁾。ゆえにこれは架空の対話、あるいは自問自答ということであり、渡辺一夫の造語を借用すれば《monodialogue》ということになろう⁽¹⁹⁾。第90信にはこの一節の後にもティレが多用されており、著作の形式に関する自問自答がなされているのが見られるのである。

次に《L'homme》については、どの日本語訳でも「人間」と訳されているが、単に「人」と訳すこともできるだろう（英訳では《Man》）。いずれにしても、第2行に《périssons》、第3行に《ne faisons pas》とあるように、自己を含めた人間一般を指していることは間違いのない。しかし想像力をふくらませて「人類」へと拡大解釈する詩人がいる。大江健三郎がエッセー「黄昏の読書」で紹介している英国の詩人 R. S. トーマスである。また後で触れることにして、ここでは取りあえず《l'homme》が「人」や「人間」のみならず「人類」(l'humanité) までをも射程におさめた語であることを覚えておこう。

《périssable》も曖昧な語である。第2行に《périssons》とある動詞《périr》の形容詞形であるが、ロベール仏語辞典によると《périr》の主語が人の場合《mourir》と同義とある。とすれば《L'homme est périssable.》は《L'homme est mortel.》とパラフレーズできよう⁽²⁰⁾。その意味で、「人間は死すべきものである。」と訳している神吉/佐々木訳は必ずしも間違いではなく、むしろ分かりやすい訳というべきである。また、ウナムーノがこの一節を引用した『生の悲劇的感情』の第3章が「不滅への渴望」と題されていることにも合致しよう⁽²¹⁾。しかし、《L'homme est périssable.》がティレを挟んで《Il se peut》で受けられていることが気にかかる。「人間が死すべきものである」のは確実であるのに、「そうかもしれない、それはありうる」という受け答えはちぐはぐではないだろうか。ここで第2行の注釈の先取りになるが、あるフランス語ネイティブ・スピーカーによると、《Il se peut》は《Soit》や《Admettons》とパラフレーズできるとのことである。確かに、《Il se peut》という句は単なる相槌に過ぎないと考えることもできるだろう。その解釈に立てば、《Il se peut》は単に「人間が死すべきものである」ことの確認をしている句ともとれる。神吉/佐々木訳もそう解釈しているのかもしれないし、「確かに」を挿入して訳文全体の違和感を解消しているかに見える。しかしながら、もう少しテキスト原文にこだわり、《Il se peut》という句があくまで可能性を表す動詞《pouvoir》を使用している事実を強調するならば⁽²²⁾、このやり取りはやはりずれていると言わざるを得ず、この架空の対話の整合性は薄れてしまうのである。

ここでさらに第3行に進んで《néant》なる語のあることに注目してみよう。後述するように、この語は人間の死後に待ちかまえている無の世界を意味すると考えられる。とすれば、

《L'homme est périssable.》とは、人間は死すべきものであるが、のみならず、死とともに一切は無に帰してしまう、そういう存在であると解釈できはしないだろうか⁽²³⁾。

ところで、《L'homme est périssable.》は神吉/佐々木訳以外では概ね「人間は滅ぶものである」と訳されている。しかし、「人間が滅ぶ」とはどういうことだろうか。単に「肉体が滅ぶ」、つまり「死ぬ」ということではないことは上で見たとおりである。また、「身を滅ぼす」「身の破滅」という表現があるが、それは後述するように『オーベルマン』第90信のコンテクトにおいてはむしろ避けるべきこととされている。そもそもこの一節を日本で一番早く訳して発表した渡辺一夫は、カトリックのミッションスクールである晩星中学出身であるが、キリスト教でいう「滅び」(perdition)と関連があるのだろうか。ロベール仏語辞典によると、《perdition》とは「教会と救いの道からの隔たり、罪による魂の破滅」を意味する神学用語である。しかしセナンクールはカトリック教会から距離を置いていたし、渡辺一夫も同様であることはエッセー「カトリシズムと僕」に見られるとおりである⁽²⁴⁾。そこで、渡辺が『オーベルマン』のこの一節をどのように取り上げているか検討してみよう。筆者の知る限りでは、彼は自らの著書やエッセーで問題の一節を5回引用しているが⁽²⁵⁾、ここでは代表的なケースと思われる最初のエッセーを紹介してみたい。1942年5月に執筆された「砂丘での対話」である。monodialogue “livresque” という副題が添えてあり、AとBの対話という形式をとっているが、本人も「附記」で認めているように、ともに渡辺の分身である。大江健三郎によると「暗い渡辺一夫」と「明るい渡辺一夫」ということになる⁽²⁶⁾。「先生は、自分が打ちのめされるかもしれない、弱い人間だ、ということ強く感じていられた。そしてまた、ある種のニヒリズムも先生の一部にあった。しかもそれらを乗り越えて行かねばならないという気持ちがさらに強くある。」⁽²⁷⁾太平洋戦争開戦から半年後という暗い時代にあって、つい弱音を吐く前者に対して、後者は「思想や人間の善意が現実に対して無力であるとしても、それは正しいことではないと思うべきなのだ。(中略)特に思想や文化などの分野にいる人々が、所謂複雑怪奇な現実を前にして人間の思想が虚無であり無力であることを感じて自己嗜虐に耽ったって、何の役に立たぬのだよ。」⁽²⁸⁾と応答した後、『オーベルマン』の例の一節を引用するのである。これを受けて大江は解説する、「あるきわめて暗いところがあって、何をやってももうだめだ、と感じる性癖が先生に確実にあるということです。同時に、それを認めた上で、つまり人間は滅びるものかもしれないということを認めた上で、しかしなんとかそれを押し返して、人間らしく生き延びることを考えてゆこうじゃないか、それが人間らしいことではないか、という考え方がきます。」⁽²⁹⁾「人間が滅ぶ」とは「何をやってももうだめだ、と感じる」ことであり、いってみれば「精神が滅ぶ」ということであると理解される⁽³⁰⁾。しかし、第2行の先取りになるが、《périssons en résistant》の「抵抗」とは人間の知的・精神的活動を意味すると考えられる。してみると「精神的活動をしつつ、精神が滅ぶ」というこ

とになるので、大江（ないし渡辺）の解釈は疑問の余地があると思われるのである。

そこで、ロベール仏語辞典でもう一度《périr》をひくと、主語が物の場合《disparaître》と同義とある。『オーベルマン』における用例としては第33信に《Qu'importe ce qui peut périr ? Tout passe, excepté la justice cachée sous le voile des choses inconstantes.》(p. 122. 以下、ボード体による強調は筆者)とあり、また同様の表現として第18信に《Que m'importe ce qui peut finir ?》(p. 84)とあって、一貫して「終わりがあるもの」に価値を認めないオーベルマンの固定観念が窺われるのである。さらに、我々が問題にしている第90信の一節の少し前に《Rien n'est sérieux s'il ne peut être durable.》(p. 502)とある。以上のことを考え併せると、《ce qui peut périr》とは《durable》ではない《des choses inconstantes》であって、「終わりがあるもの」「永続しないもの」「いずれ消えゆくもの」である。『オーベルマン』第90信のコンテキストにおいては、再会した Del*** 夫人との間に妄想された一時の情欲がそれに当たるだろう。さて、《ce qui peut périr》は《ce qui est périssable》と同価であるので、《L'homme est périssable.》とは、そのような束の間の、はかないものに囚われがちな人間の姿を述べたものとも考えられるのである。

以上述べたことを総合すると、人は生きている間は移ろい易い存在であり、いつか必ず死ぬ運命にあり、また死後もどうなるかわからない存在であるということになる。そこで試みに「人はいずれ消えゆくものである。」という私訳をここで提案してみたい。

最後に、英国の詩人 R. S. トーマスについて紹介しよう。彼が『オーベルマン』のこの一節を引用し、《L'homme》を「人類」へと拡大解釈していると上で述べたが、実はその時彼は核戦争による滅亡の危機に瀕している「人類」(《the annihilation of the species》)について語っていたのである⁽³¹⁾。無論、セナンクール時代に原子爆弾は存在せず、彼にそのような形で人類滅亡の危機意識がなかったことはいうまでもない。その意味で「人類は滅亡するかもしれない」という訳は行き過ぎであろう。しかし、この文自体はそのような解釈をも許す幅を備えているということである。実際、渡辺一夫は「ある宰相の話」の中で宗教戦争期のフランスの宰相ミシェル・ド・ロビタルの「無駄な努力」を紹介した後、「『人類はしよせん滅びるものかもしれない。しかし、それに抵抗しながら滅びよう』というセナンクールの言葉が、しみじみと響いてきます。」という文で締めくくっている⁽³²⁾。「人間」ではなく「人類」と表記されていることに注目したい。執筆時期は「juin 1947-juin 1964」と記されているが、やはり渡辺も冷戦期において、核戦争の危機を感じていたのであろうか。

ここでまとめてみよう。

「人はいずれ消えゆくものである。」

「人間は死すべきものである。」

「人間は滅ぶものである。」

「人類は滅亡するかもしれない。」⁽³³⁾

《L'homme est périssable.》の解釈をめぐって、人は生きている間は移ろい易い存在であり、死後ともなるかわからない存在であるという意味で「人はいずれ消えゆくものである。」という訳を筆者は提案した。しかし一方でこのフランス語文は「人類は滅亡するかもしれない。」という解釈も許す。このような多義性、曖昧性を表しうるという意味において、「人間は滅ぶものである。」という訳は案外有効であるのかもしれない。

(第2行) **Il se peut ; mais périssons en résistant,**

俗に「滅びの美学」というが、『オーベルマン』第90信のコンテキストでは「滅び」が積極的に勧められているとは思われない。オーベルマンが Del*** 夫人への想いをストイックに断ち切っていることから見ればその逆であって、むしろジェロンディフで示された「抵抗」の方こそがこの文の眼目であると思われる。その意味で、後述するウナムーノの筆頭に倣って《ne périssons pas sans résistance》と書き換えたいところである。その方が、この一節を『ドイツ人の友への手紙』の「第4の手紙」のエピグラフとして引用したカミュの意図にも合致するであろう。というのも、『オーベルマン』第90信のこの一節は、対独「レジスタンス擁護のための有力な論拠」⁽³⁴⁾をカミュに提供したと推察されるからである。すなわち、カミュは「コンパ」の記者として非合法ジャーナリズムの世界に身を投じ、対独レジスタンス活動に命を賭けた。ナチスという、人間存在を無化する勢力⁽³⁵⁾に立ち向かい、ペンの力で「抵抗」を試みたわけである。一方、オーベルマンにあっては、死によって一切が無に帰してしまうかもしれない人間の条件の下で、なおも思考の力を行使して著作を遺し、永遠の忘却である「無」への抵抗を計るという、古来からある不滅への意志を表明していると受け止められる。

かくのごとく、『オーベルマン』の言葉を、カミュはレジスタンスの闘士として、渡辺一夫は学者、「ユマニスト」として、トーマスは詩人として、それぞれ自分の生き方に引きつけて解釈しているわけである。

(第3行) **et, si le néant nous est réservé,**

先ず、接続詞《et》は目立たないながら、第2行の《périssons》と第4行の《ne faisons pas》を論理的に連結する役目を果たしているといえるだろう。

次に、《si》を後回しにして《néant》の使用に関して述べると、例えば『オーベルマン』第41信に《le néant de ma vie》(p. 175)という用例がある。この語句が「空虚な生活」「虚ろ

な人生」を意味しているのはいうまでもない。『オーベルマン』にはこのような《néant》の用例が多く⁽³⁶⁾、オーベルマンにとって、この世（現世）がすでに《néant》であることを示している。いわゆる世紀病に冒され、いわば生きながら「滅び」た青年オーベルマンの嘆きである。しかし、第90信においては直後に《réserve》の語が使用されていることを考え併せると、《néant》はやはり死後のことを指していると思われる。つまり、我々が死んだ後、一切は無に帰してしまうということである。その意味で、訳語としては「虚無」より「無」の方が適当なのではないだろうか⁽³⁷⁾。

《réserve》は白井訳によると「予約されている」となっている。氏の訳文には多少突飛なところも見受けられるが、それゆえ、逆に考えるヒントを与えてくれることがある。「予約されている」という訳文は、オーベルマンの言葉がキリスト者の「我々の国籍は天にある」とする信条のパロディであることを示唆する。つまり、キリスト者が地上の生活を終えたとき天に召されると考えられているのに対して、死後の「予約席」「指定席」は天にはなく、ただ無の世界が広がっているということである。

しかし、ここで《si》に戻ると、死後の世界が「無」であるということが、《si》を使用することによりあくまでも仮定の話であり、譲歩であることが慎重に示唆されているとも言えるのである。

いずれにせよ、この「無」に対して、文学者は作品を書くことによって立ち向かうのだ、とはデュアメルが『文芸の擁護』の中で述べていることであるが、実はそのコンテクストの中で『オーベルマン』の例の一節が引用されているのである⁽³⁸⁾。

(第4行) *ne faisons pas que ce soit une justice.*

行頭の否定命令句《ne faisons pas》は第2行の肯定命令句《périssons》に呼応する。デュアメルが『文芸の擁護』の中で紹介しているところによれば、ウナムーノはこの一文を《faisons que ce ne soit pas une justice》と読み替えることを提案している⁽³⁹⁾。フランス人であるデュアメルはさらに不定冠詞を省いて《faisons que ce ne soit pas justice》に修正している。現代フランス語において《C'est justice.》や《Ce n'est que justice.》といえば「それは正しいこと」「当然のこと」を意味するので、無冠詞の方が現代のフランス人には通りが良いのであろう。（英訳では《just one》となっている。）しかし『オーベルマン』にはこの他にも《C'est une justice de tuer ceux qui veulent vivre.》(p. 184) というように、不定冠詞付きの用例があるのである⁽⁴⁰⁾。

ところで、《ne faisons pas》であれ《faisons》であれ、接続詞《que》以下の従属節中の動詞は接続法になる。いうまでもなく《faire que》が願望を表す場合は接続法を要求する

らであるが、本来、接続法は従属節中の過程 (procès) が事実ではなく、あくまで観念に過ぎないことを表している。その意味で、テキスト原文の形《ne faisons pas que ce soit une justice》は、「それ（無が我々を待ち受けていること）が正しいこと、当然のことである」ということが事実ではないことを逆に訴えているのだ、といえはあまりに穿ち過ぎであろうか。

さて、テキストを勝手に改変することの可否は別として、ウナムーノによるテキストの読み替えは、第2行末尾の語句《périssons en résistant》の読解を助ける。「抵抗しつつ滅びよう」という、このいわば「レジスタンス」の勤めの戦略的意義が、ウナムーノによるテキストの読み替えによって一層明瞭になるのである。すなわち、仮に「無」が我々を待ち受けているとして、そこでもし抵抗を見せなかったら、そのことが「正しい、当然のこと」と認めてしまうことになる。否認や抵抗を示すことによってはじめて、それが「正しい、当然のこと」ではないのだと主張することができるのである。以上のようなオーベルマンのロジックを基本としつつ、ウナムーノは主節を《ne faisons pas》という否定命令から《faisons》という肯定命令に転換することによって、「抵抗」行為に積極的意義を増し加えると同時に、従属節を《ce soit une justice》という肯定形から《ce ne soit pas une justice》という否定形に変えることにより、「無」が我々を待ち受けていることの不当性 (injustice) を強調するのである。先ほど紹介した渡辺一夫の「砂丘での対話」において述べられた「思想や人間の善意が現実に対して無力であるとしても、それは正しいことではないと思うべきなのだ」という発言は、このウナムーノの言い替えを下敷きにしていたと考えられる。

さて、《justice》は白井訳によると「裁き」となっており、これまたある意味で興味深いことである。実際、「人間は滅ぶべき者である」と訳してしまうと（ましてや「人類は滅亡する」という訳だとなおさら）、どうしても「世の終わり」、「終末」、「神の裁き」、「最後の審判」(le Dernier Jugement) といったことが連想される。キリスト者でないカミュにとって、神の裁きは認められないということであろうか。確かに、《justice》という語は正義、公正、正しいこと、と並んで裁き、裁判等を表す多義的な語である。しかしながら、キリスト教において人は信仰により神に義とせられるといわれる場合⁽⁴¹⁾、「義」は《justice》で表されるが、「裁き」には《jugement》の語が使用されるのである。

ところで、イエスは八箇条にわたる山上の垂訓において、二度にわたって義の追求を賞揚したが⁽⁴²⁾、実はオーベルマンも「義に飢え乾く人」なのである。第1行の注釈において《Que m'importe ce qui peut périr ? Tout passe, excepté la justice cachée sous le voile des choses inconstantes.》という用例を引用したが、その数頁あとに《Ne t'isole point de l'ensemble du monde ; regarde toujours l'univers, et souviens-toi de la justice. Tu auras rempli ta vie : tu auras fait ce qui est de l'homme.》(p. 126) とある。超越的な存在としての「正義」への希求がここには見られる。それが「神」と呼べるかどうかは別として。

カミュに話を戻すと、彼は『オーベルマン』のこの一節の中に「レジスタンス」の勧めを読み取ったように、《justice》もまた「第4の手紙」の文脈では、やはり「正義」を含意するものとして引用したのではないだろうか⁽⁴³⁾。彼もデュアメルや渡辺一夫らと同様、『オーベルマン』のコンテクストからは微妙に逸脱してわが身に引きつけて解釈している。が、しかし彼らと違って『オーベルマン』第90信という典拠を明示している。このこともカミュの「誠実さ」を例証しているのだろうか。あるいは、『オーベルマン』の手紙形式に想を得て『ドイツ人の友への手紙』は構成されたのであろうか。

* * *

《périssable》や《périssons》のもととなる動詞《périr》には「非業の死を遂げる」というニュアンスがある。

セナンクールより8歳年長の詩人アンドレ・シェニエ（1762-94）はフランス革命期にロベスピエール一派の反感を買い、捕らえられ、遂には断頭台の露と消えた。彼は獄中で怒りに燃えて『風刺詩』を書き上げたが、それは次のような詩句で終わっている。

Allons, étouffe tes clameurs;
Souffre, ô cœur gros de la haine, affamé de justice.
Toi, Vertu, pleure si je meurs.⁽⁴⁴⁾

公正な裁きを希求しつつ非業の死を遂げたシェニエであったが、バスカルの意味において皆が「死刑囚」⁽⁴⁵⁾である我々にとっても、各々が早晚迎えざるを得ない死の訪れは、いつの日か不本意にやって来るという意味において、やはり「非業の死」といえるのではないか。そういう人間の運命に抵抗すること、それがせめてもの生の証しとなるのだと、『オーベルマン』の一節は訴えかけているようである。

《Traduire, c'est trahir.》といわれるが、翻訳のみならず同国人の文学者からも「曲解」されてきた『オーベルマン』の一節。日本への憧憬を記したこともあるオーベルマンであったが⁽⁴⁶⁾、彼が書き遺した一節が、その遠い島国の文学者らからは好感をもって受けとめられている。この一節によってセナンクールの名が後世に伝えられるとすれば、もって瞑すべしというべきかもしれない。因みに、サン・クルーの墓地に永眠するセナンクールの墓碑銘は「永遠よ、わが隠れ家なれ！」《Éternité, deviens mon asyle !》とのことである⁽⁴⁷⁾。

注

- (1) 以下に詳しい書誌がある: Jean Grenier, *Cahier dirigé par Jacques ANDRÉ, Romillé, Folle Avoine*, 1990.
- (2) Jean GRENIER, *Senancour, les plus belles pages*, Mercure de France, 1968.
- (3) 《L'homme est périssable. — Il se peut ; mais périssons en résistant, et, si le néant nous est réservé, ne faisons pas que ce soit une justice.》(Etienne-Pivert de SENANCOUR, *Obermann*, Paris, Charpentier, 1840, p. 503) 以下, 『オーベルマン』からの引用はすべてこのテキストによる。
- (4) Albert CAMUS, *Lettres à un ami allemand in Essais*, Paris, Gallimard, 《La Pléiade》, 1965, 1984, p. 239. 引用文は正確であるが, 《justice》のあとのボワン(.)が感嘆符(!)になっている。
- (5) ヴィヴィル＝カルボネルはセナンクールとカミュに関する論考の中で, カミュの作品におけるセナンクールの影響について論じ, 両者を「不安の類縁性」において結びつけている。ただし, 両者の影響関係について決定的な証拠は提示されていない。Danielle VIEVILLE-CARBONEL, 《Senancour et Camus ou les affinités de l'inquiétude》in *Revue des sciences humaines*, Tome XXXIV, N° 136, oct.-déc. 1969, p. 609-615.
- (6) 大江健三郎『現代日本のユマニスト 渡辺一夫』(岩波書店, 1984)
- (7) 雑誌『世界』1996年1月号(岩波書店)に発表された後に, 改稿されて『ゆるやかな絆』(講談社, 1996)に収録。
- (8) Jean GRENIER, *Albert Camus, 《souvenirs》*, Paris, Gallimard, 1968. (井上究一郎訳『アルベール・カミュ回想』(竹内書店, 1972))
- (9) *Albert Camus-Jean Grenier : Correspondance 1932-1960*, Paris, Gallimard, 1981. (大久保俊彦訳『カミュ＝グルニエ往復書簡(1932-1960)』(国文社, 1987))
- (10) *Ibid.*, p. 121, p. 142.
- (11) Georges DUHAMEL, *Défense des Lettres*, Mercure de France, 1937, p. 301-302.
- (12) 《La posséder et mourir !》(p. 501)
- (13) 『渡辺一夫著作集10』(筑摩書房, 1970, 1977)所収, p. 112.
- (14) セナンクール『オーベルマン下』(岩波文庫, 1959, 1986) p. 299.
- (15) 『カミュ全集3』(新潮社, 1972)所収, p. 153.
- (16) 『ウナムーノ著作集3』(法政大学出版局, 1975) p. 51. 原著はスペイン語であるが(Miguel de Unamuno, *Del sentimiento trágico de la vida en los hombres y en pueblos* (1913), 筆者参照版: Madrid, Espasa-Calpe, 1985, p. 59), 『オーベルマン』からの引用はフランス語原文である。
- (17) *Obermann*, translated, with Introduction and Notes, by J. Anthony Barnes, London, The Walter Scott Publishing, 1910, vol. II, p. 252.
- (18) Jean ROUSSET, *Forme et signification*, Paris, José Corti, 1962, 1984, p. 76.
- (19) 「砂丘での会話」(『渡辺一夫著作集10』p. 106)の副題に monodialogue “livresque” とある。
- (20) しかし, 例えば《L'homme est mortel et ses œuvres sont périssables.》といった文におけるように, 《périssable》なる語は人ではなく物にかかるのが普通である。このことも《L'homme est périssable.》という文を分かりにくくしている要因である。
- (21) ウナムーノによると, この一節は「セナンクールが彼の主人公オーベルマンに吐かしたカトリックの絶望の表現」とのことである。しかし, 全てを神にゆだねて受容するはずのキリスト者にとって, 「カトリックの絶望」(la desesperación católica)とは一体いかなるものであろうか?
- (22) Cf. 《Ce sont des contes, et vous-même, monsieur, vous êtes fabuleux. — Que je le sois devenu dans la suite des âges, il se peut》(Anatole FRANCE, *Jardin d'Épicure*, cité dans le *Trésor de la*

langue française, Paris, Gallimard, 1988, t. 13, p. 977). 以下、ボールド体による強調は筆者。

- (23) ただし、「Il se peut」という句が可能性を表す動詞《pouvoir》を使用していることに今一度注目すると、死後の世界は可能性として逆に留保されているとも考えられるのである。第90信は既述したように『オーベルマン』第2版(1833)で初出するが、初版(1804)に見られるカトリック教会(教義)批判の言辭が、第2版では幾分緩和されていることも考慮したい。
- (24) 『渡辺一夫著作集10』所収, p. 348-359.
- (25) 「砂丘での対話」(1942年5月), 「ユマニストのいやし」(1942年8月), 「空しい祈禱」(1946年1月), 「デカダンスについて」(1946年1月), 「ある宰相の話」(1947年6月-1964年6月)。
- (26) 大江健三郎『現代日本のユマニスト 渡辺一夫』, p. 26. 大江に倣えば, 「オーベルマン」の例の一節は「暗い(ペシミストの)オーベルマン」と「明るい(オプチミストの)オーベルマン」の対話ということになろう。
- (27) 大江健三郎, 前掲書, p. 29.
- (28) 『渡辺一夫著作集10』p. 111-112.
- (29) 大江健三郎, 前掲書, p. 28.
- (30) 因みに, 「オーベルマン」には《cœur périssable》という用例が2つある。《Le cœur de l'homme, si mobile, si périssable, trouve une sorte de perpétuité dans cette communication des sentiments populaires qui les propage, les accroît et semble les éterniser.》(p. 285) 《N'était-ce pas une nécessité de rêver nous seules sur cette agitation qui, dans un cœur périssable creuse un abîme d'avidité qui semble ne pouvoir être rempli que par des choses impérissables ?》(p. 315)
- (31) 大江健三郎『ゆるやかな絆』に紹介 (p. 118-119)。なお、原著は英語であるが(Ned THOMAS and John BARNIE, 《Probidings: An Interview with R. S. Thomas》in William V. DAVIS (ed), *Miraculous Simplicity, Essays on R. S. Thomas*, Fayetteville, The University of Arkansas Press, 1993, p. 34), 「オーベルマン」からの引用はフランス語原文である(一部省略あり)。
- (32) 渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』(白水社, 1979) 所収, p. 267.
- (33) このリストに「人間は朽ちるものである。」という訳を追加してもよいかもしれない。《périssable》は日常生活において例えば《denrées périssables》とあるように「腐りやすい」「傷みやすい」という意味がある。人間も「生身」であるからには、ほっておけば腐敗、墮落するものだ、ということに連想が及ぶ。しかし、《périssable》に関して『オーベルマン』にはそのような用例は無く、またテクストも《pourrissable》や《pourrissent》とはなっていない以上、やはりこの訳は無理かもしれない。
- (34) 株木栄一『アルベール・カミュとその時代(上)』(駿河台出版社, 1987) p. 206.
- (35) 《Vous en avez conclu que l'homme n'était rien et qu'on pouvait tuer son âme》(CAMUS, *op. cit.*, p. 240)
- (36) 他にも例えば: 《Dans ce jour, le premier où je sentis le néant qui m'environne, dans ce jour qui a changé ma vie》(p. 5); 《dans quel néant ils nous retiennent, et qu'il est fatigant de vivre parmi des êtres turbulents et muets !》(p. 170); 《quand je veux reprocher aux choses l'impuissance et le néant où je vis》(p. 381).
- (37) 上で見た「砂丘での対話」におけるように、渡辺一夫にとって《néant》とは「人間の思想が虚無であり無力であること」を意味した。
- (38) 《La majeure partie des écrivains, par le fait même qu'ils poursuivent une œuvre, bonne ou mauvaise, affirment un sentiment nécessairement optimiste. Nous sommes obligés de croire qu'ils refusent toute adhésion au néant, qu'ils répètent avec Sénancour: «L'homme est périssable(...)》(DUHAMEL, *op. cit.*, p. 301)

- (39) *Ibid.*, p. 302.
- (40) もちろん生を欲している人を殺すのは不当である。これは一種の自由間接話法もしくは反語法であってオーベルマンの意見ではない。オーベルマンのいう「詭弁家」《sophistes》、すなわち世の権力者の考え方を代弁し、その偽善性を糾弾しているのである。
- (41) 《Et vous qui croyez être assez pourvus de **justice** parce que vous professez le christianisme, n'affirmez-vous pas trop légèrement que nul ne deviendrait incrédule si des passions effrénées, ou des mœurs viles, ne le portaient chercher l'impunité dans le **néant**.》(SENANCOUR, *Libres méditations d'un solitaire inconnu*, Paris, Mongie et Cérioux, 1819, p. 89)
- (42) 《Heureux ceux qui ont faim et soif de la **justice**, car ils seront rassasiés !》《Heureux ceux qui sont persécutés pour la **justice**, car le royaume des cieux est à eux !》(Matthieu 5 : 7, 10)
- (43) カミュにおける「正義」の問題に関して、以下を参照。西永良成『評伝アルベール・カミュ』(白水社, 1976) p. 111-137, 「人間の「正義」の栄光と悲慘」。
- (44) André CHÉNIER, *lambes*, IX in *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, 《La Pléiade》, 1958, p. 195.
- (45) Blaise PASCAL, *Pensées*, L. 434.
- (46) 子どもの頃ケンペル (《Koempfer》と表記されているが正しくは《Kæmpfer》) の『日本誌』を読んだことが第21信で回想されている (p. 92)。
- (47) Charles Augustin SAINTE-BEUVE, *Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'Empire*, Paris, Calmann Lévy, 1878, t. I, p. 358.

«L'homme est périssable.....»

— sur un passage de la Lettre XC d'*Obermann* —

Naoyuki HAGIWARA

«L'homme est périssable. — Il se peut ; mais périssons en résistant, et, si le néant nous est réservé, ne faisons pas que ce soit une justice.» Ce dialogue intérieur du scripteur des lettres romancées (ou du roman épistolaire) de Senancour, *Obermann*, est d'abord la déclaration d'adieu à son amie Madame Del***, à l'amour éphémère («périssable»). C'est en même temps un défi à la condition mortelle de l'homme («le néant») et l'appel aux forces de la pensée qui ont la possibilité de produire une œuvre impérissable.

Mais une fois mis hors de son contexte, ce texte autorise certains écrivains français ou étrangers à l'interpréter de différentes manières . Albert Camus, par exemple, cite ce passage en épigraphe de la quatrième des *Lettres à un ami allemand* : il prend à son compte ces phrases pour proclamer, semble-t-il, la Résistance au nazisme et la recherche de «la justice». Selon Miguel de Unamuno, penseur espagnol, ce texte est l'expression de «la desesperación católica», bien que l'auteur Senancour soit loin de l'Église.

«Humaniste japonais» d'après l'expression de Kenzaburo Oé, romancier japonais, Kazuo Watanabé cite ces mots de Senancour dans ses essais à plusieurs reprises pour préconiser le rôle méconnu mais important des intellectuels lors des époques troublées. Et R. S. Thomas, poète anglais, va jusqu'à imaginer «the end» et «the annihilation of the species».

Voilà un exemple de la destinée inattendue mais intéressante des œuvres littéraires qui peuvent suivre un parcours que les auteurs n'auraient pu imaginer.